



たいしも通信

自衛隊の装備シリーズその3、空自編。空自というと、パトリオットも有名ですが、まずはやはり戦闘機は避けて通ることはできません。

◆そもそも、戦闘機とは

攻撃する航空機はすべて戦闘機、というわけではありません。攻撃相手が航空機というのが基本要件であり、地上施設や軍艦等を攻撃する任務に就く場合もあるようですが、それが主任務だと攻撃機という別の種類になります。

第一次世界大戦で航空機が初めて戦争に使用されるようになって、当初は相手機に工具や煉瓦を投げつけたりしていたようですが、それがやがて拳銃や猟銃になり、その後機体に装備された機銃やミサイルへと発展し、武器だけでなく、攻撃や回避のための運動能力が向上し、次には敵を早く発見する能力が向上し、近年ではその逆で敵から発見されにくくする、というステルス性が重要な要素となってきました。

◆F-35 戦闘機について

ジェット戦闘機は黎明期の第1世代から始まり、F 35 は第5世代機と言われます。これはステルス性を持つ先制攻撃を目的にした戦闘機で、単に機体性能が良いだけでなく、形状や塗装によりレーダー電波を反射し難くしたり、ネットワークを利用して他のセンサーからの情報を共有し、自機がレーダーを回さなくとも敵情報を探知できたりします。

当初はJSFという米空軍の統合打撃戦闘機計画に基づいて開発され、意外なようですが米国の海空軍共有に成功した機体であり、さらに世界初の実用超音速 STOVL(短距離離着陸機/ただしB型のみ)でもあるという特徴を持っています。

また、米国以外で採用を決定している国も多く、これらにより機体単価を下げる効果があるのは理解できると思います。

ただし、ステルス等の先端技術は米国でも極秘中の極秘であり、輸出先には厳しい制約が加えられています。生産や整備施設で生産が許可されている FACO(最終組立・検査施設は米本国以外ではイタリアと日本の名古屋のみ)。また、ステルス性能維持やブラックボックス等のメンテナンス・修理、オーバーホール、今後のアップグレード作業を目的とした MRO&U(国際整備拠点は米本国、イタリア、アジア圏では北半球に日本、南半球にオーストラリアだけとなっています)。

ここでアップグレードという言葉が出てきましたが、これこそ本機の特徴であり、これにより搭載コンピュータの性能向上はもちろん、何と戦闘力やミサイル搭載数の増大などの能力向上が見込まれ、アップグレード無しには本来の性能が発揮できません。何だかずっとお金をとられ続けられそうですが、機体の物理的改造や買い換えよりは安価で、また失敗や、他の性能との引き換えになることのリスクも少ないというメリットがあります。

日本は現時点で 150 機弱を導入予定であり、うち 100 機程が A 型、残りが B 型となるようで、じょじょに F 15 を置き換えていくとみられます。

▼編集後記▲

純粹に「ご心配」なのですが、例によってお隣の国は我が国に對抗して早速 F 35 を導入したものの、何と3年近く経過した今日に至っても、MRO&Uの重整備を行う先が決まっています。日本がどうしても整備させてくれ、と頼むならさせてやってもいいよと言ったとか言わなかったとか・・・

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあります。特に規則等に定めているもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。